

は同じであった。

地藏信仰の展開

——十王信仰との関わりを中心として——

森 啓 子

序 目 次

第一章 地藏菩薩の特徴	
第一節 六道の中ので蔵菩薩	
第二節 地藏菩薩の誓願	
第三節 地藏菩薩の功德	
第四節 地藏菩薩像	
第二章 閻魔王の特徴	
第一節 初期經典に見られる閻魔王	
第二節 地藏菩薩と閻魔王とのつながり	
第三章 十王信仰との関わり	
第一節 中国における地藏信仰	
第一項 『十王經』	
第二項 『地藏菩薩經』	
第三項 三階教	
第四項 『占察善惡業報經』	
第二節 日本における地藏信仰	
第一項 地藏菩薩と閻魔王の発展	
第二項 『発心因縁十王經』	
第三項 民間への広がり	
結 論	

序 論

地藏菩薩とは、佛滅後五十六億七千万年後に弥勒がこの世に出世するまでの間、この世に現れ、六道の世界に在って一切衆生を救済するという菩薩である。^①

地藏菩薩は、もともとバラモン教の地神に由来するという説があるが、インドでは独立した菩薩信仰として発展しなかった。しかし、中国においては、七世紀に地藏三部経が成立しており、それ以後、地藏信仰は広く浸透した。そして地藏菩薩は、閻魔王と関係を持つ菩薩として十王信仰と深く結びついた。

本研究の目的は、日本では閻魔王の本地が地藏菩薩とされていることから、なぜ地藏菩薩と閻魔王が関係するのかを中国まで遡って明確にすることである。主に『地藏三部経』と『十王経』を中心に、中国から日本に至るまでの発展を、地藏菩薩の特徴と十王信仰、特に閻魔王との関係に注目して明らかにしていく。

第一章 地藏菩薩の特徴

地藏菩薩の特徴を、主に『地藏菩薩本願経』『十輪経』から功德、誓願を中心として考察する。

地藏菩薩は、一切衆生が悟りを得るまでは、決して成仏することなく衆生を救い続けるという誓願を立てている。^②他の観音、勢至、普賢などの諸菩薩は各々の誓願の中でいずれ成仏し、それぞれの仏

国土へ行くと記されているので、この地藏菩薩の誓願は特殊なものと言える。さらに地藏菩薩の功德は、般涅槃を得るというものもあるが、加えて土地豊穡、病が治る、衣食住に困らないなどの現世的なものがより強調して説かれる。^④

第二章 閻魔王の特徴

閻魔王は、ヴェーダ文献や『世記経』、『天使経』などに中有に在る存在として説かれる。冥土において死者の生前の行いを裁き、その後死者のその後の行き先を決定する。

また、『地藏菩薩本願経』に、閻魔王が世尊に「地藏菩薩は懸命に衆生を救おうとしているにもかかわらず、何故衆生は地獄に堕ちるのか」ということを聞くことが記されたり、或いは『経律異相』には閻魔王は罪人を救うという誓願を立てていることが記される。^⑤
この様に、地藏菩薩と関係する記述も多く見られる。^⑥

第三章 十王信仰との関わり

『十王経』と呼ばれる経典には二種類ある。一つは中国で作られた『預修十王生七経』、二つには日本において鎌倉時代以後流布をみた『発心因縁十王経』である。

『十王経』の内容は、両経共に死者が冥土で十人の王に、順次裁かれる様子が述べられ、生前の善根の備蓄や、死者の親類縁者達の追善供養によって死者の裁判が有利に運ぶということが説かれてい

結 論

る。十王の裁きは死後七日目から始まり、以後七日ごとに四十九日までと、百日目、一周忌、三周忌に行われる。

地藏菩薩と閻魔王の關係が最も顯著に説かれている經典に『地藏菩薩經』があげられる。「十王經図卷」には、卷頭に『地藏菩薩經』が記され、また經文と共に図を用いており、十王の裁きに加えて地藏菩薩も地獄の救済者として描かれている。

また、中国に於いて地藏菩薩が浸透したのには、三階教の影響が非常に強いと考えられる。三階教は、地藏菩薩こそが末法の世の救済者であると重要視し、三階教の發展と共に、地藏菩薩も次第に中国において發展していった。

日本においては奈良時代に『日本靈異記』の「藤原広足蘇生譚」(卷下・九)に地藏菩薩が閻魔王の本地として以下の様に説かれている。広足が地獄に彼を召して亡き妻の苦を示した人にその名を聞いた所、「欲知我、我閻羅王、汝国称地藏菩薩是也。」と答えたという話である。この地藏菩薩が閻魔王の本地だという記述をはじめとして、平安時代の「今昔物語集」などの説話にも地藏菩薩や閻魔王の記述が多くある。

その後、地藏信仰が盛んになる鎌倉時代に、『発心因縁十王經』が『預修十王七生經』を元にして作られた。

『発心因縁十王經』では、閻魔王の本地が地藏菩薩であるとはっきりと明記され、經典の半分以上が地藏菩薩、つまり閻魔王についての記述となっている。

日本では、閻魔王の本地が地藏菩薩であるとされており、中国においても、地藏菩薩と閻魔王は密接に關係している。本稿では、地藏菩薩と閻魔王が關係するのかを明確にするために地藏信仰の發展を追ってきた。

『預修十王七生經』の讚が記され、十王の裁判の様子が描かれる「十王經図卷」には冒頭に『地藏菩薩經』が記され、五七の閻魔王の裁きの場面には、地藏菩薩が閻魔王の裁きに冤罪が無いかどうかを確かめるために閻魔王の隣に座って裁きを見ているという絵が描かれる。『十輪經』には、はっきりと地藏菩薩が閻魔王の姿を成すという記述があるが、「十王經図卷」では閻魔王と地藏菩薩は別々のものとして説かれ、描かれてもいる。

敦煌出土の被帽地藏菩薩図を見ても、十王と共に描かれるものは多くあるが、『十輪經』にあるように一体化はしていない。

しかし日本において、鎌倉時代に撰述された『発心因縁十王經』には、閻魔王の本地は地藏菩薩であると記され、閻魔王以外の九人の王にもそれぞれ本地仏が明記される。

そして鎌倉時代から江戸時代にかけて、十王の頭上に本地仏が描かれる十王図が多く制作されるようになる。

この様に中国、日本共に地藏菩薩と閻魔王が關係する理由は、中国においては『地藏菩薩經』にあるように、地藏菩薩は閻魔王の裁

きが正しく行われているかどうかを監視するために側にいる。だから被帽の地藏菩薩像にも地藏菩薩は閻魔王と別々の人物として描かれる。また、地獄に堕ちたとしても必ず救われるという象徴として、死者を地獄に堕とす閻魔王と、地獄から死者を救う地藏菩薩を共に描いたのではないだろうか。

しかし日本においては、地藏菩薩と閻魔王が同体として説かれ、「十王図」として絵にも描かれる。これは地藏菩薩の六道、特に地獄から死者を救うという特徴と、閻魔王が冥界や地獄において死者の生前の行いを裁くという性格、また両者共に死者のその後の行き先を決定する権限を持っていることから同体と見たのではないだろうか。また、中国の被帽地藏菩薩図や「十王経図巻」に地藏菩薩と閻魔王が同じ絵に共に描かれることから、地藏菩薩と閻魔王が深く関係すると見て、両者が同体であるという様に発展を成したと考えられる。

註

- ① 『地藏菩薩本願経』 大正・一三・七七九頁・中
- ② 『地藏菩薩本願経』 大正・一三・七七八頁・中・七七七頁・上
- ③ 『悲華経』 大正・三・一八六頁・上・中、大正・三・一九二頁・中
- ④ 『大乘大衆地藏十輪経』 大正・一三・七二四頁・上・下
- ⑤ 『地藏菩薩本願経』 大正・一三・七八三頁・下・七八五頁・下
- ⑥ 『経律異相』 大正・五三・五八頁・下

『不増不減経』の如来蔵思想

脇 屋 智 道

目 次

- 序 論
- 第一章 『不増不減経』の構造とその考察
- 一 全体概要
 - 二 衆生海増減の問い
 - 三 衆生界増減の答え
 - 四 二種の増減見
 - 五 衆生界の減見
 - 六 増減見により起こる邪見
 - 1 減見により起こる邪見
 - 2 増見により起こる邪見
 - 七 一界の主張
 - 八 甚深義に対する問い
 - 九 甚深義に対する答え
 - 十 法身の性質
 - 十一 法身の三種のあり方
 - 十二 如来蔵の三特質
 - 十三 眞実・如なる法
 - 十四 二種増減見の一致
 - 十五 全体考察
- 第二章 『如来蔵経』と『不増不減経』